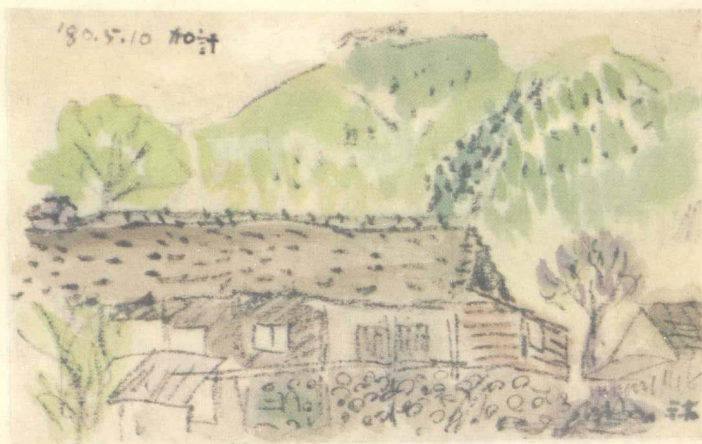


随筆集

冬の祭り

今西祐行



随筆集冬の祭り
今西祐行

偕成社

著者略歴

一九二三年、大阪府に生まれる。早稲田大学仏文科卒。処女作『ハコちゃん』発表以来、児童文学創作の道を歩む。著書には『そのひつじかい』『太郎コオロギ』『肥後の石工』（国際アンデルセン賞国内賞・日本児童文学者協会賞他）『浦上の旅人たち』（野間児童文芸賞他）『光と風と雲と樹と』（小学館文学賞）など多数がある。住所／神奈川県津久井郡藤野町牧野一一、九八〇

冬の祭り

一九八一年二月 一刷
一九八四年三月 二刷

著者 今西祐行

発行者 今村 廣

発行者 株式会社 偕成社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町三一五
振替口座 東京 五一―一三五二

印刷所 新興印刷

製本所 文勇堂製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替え致します

© Sukeyuki Imanishi 1981

Printed in Japan

ISBN4-03-003050-5

冬の祭り／目次

I

耕すこと	9
不滅の定律	10
読むということ	14
泉のごとく	17
私が筆をとる時	18
私の文体	22
私の表現	25

II

「ハコちゃん」を書いたころ	49
「小さな海」のことなど	53
お答え	56
「はまひるがお」と「ひるがお」	59
わたしの児童文学	62

誰がために 65

人のところを求めつつ 67

石工帰郷 71

心に刻んだ記念碑 73

「浦上の旅人たち」について 75

「太郎こおろぎ」によせて 77

T先生 80

「一つの花」のこと 82

石をみがく少年 85

「やいちとふじまる」のこと 88

「バイオリンのおとは山のおと」由来

「歴史の中の少年たち」より 92 90

二十六聖人の中に

沖縄の小学生

ヒロシマの子ら

五つのりんご

わたしの能・狂言	103
八月十五日に想う	106
敗戦まで	110

III

坪田先生と私	125
坪田文学の奥にあるもの	129
与田準一・人と作品	135
朱 ^さ 禪 ^{ぜん} のうた	139

「クミの絵のてらん会」のこと

147

IV

わが家の神さま	153
どんぐりのことなど	161
オトギリ草や汽車の音	164
幼き日の友・植物	167

さやえんどうと「都の西北」

172

はじめての本の思い出

175

私の母

179

V

近況

197

そっとしておいてやりたい

199

山の文庫だより

202

図書館の道

205

真衣^{まゐ}野^の牧^{まき}

207

山遊び

214

岩魚^{いわい}わずらい

222

冬の祭り

230

薬師寺にて

233

被爆者健康手帳

236

ある読者への手紙——あとがきにかえて

装丁 今西祐行

冬の祭り

耕すこと

私は山里の小さな部落に住んでいるのだが、いつも山の斜面の畑で会う老人がある。その人の畑はいつもきれいに耕されて美しい文様を作っている。春には春の、夏には夏の、秋には秋の、そして何も植わっていない冬にも、この老人の畑は美しい文様を作っている。風紋のように自然で、けっして人が作ったものとは思えない。この老人の鍬は、力まず休まずいつもごく自然に動いている。この老人のからだの動き自体が畑にとけこんでいて、そこに人がいると気がつかないときさえある。

この老人の畑にはいつも豊かで美しい稔りがある。

私は山の畑でこの老人に会うたびに思うのである。百姓にかぎらず、人間のするほんとうの仕事というものは、何かを作りあげることでも、掘り出すものでもなく、自然の稔りを待つて耕すことではないかと。

不滅の定律

それが誰の詩であつたかどうしても思い出せないのだが、それを講読してくださった山内義雄先生のフランス語の美しかったことだけはけっきりおぼえているので、あるいは先生のお好きだつたポール・クロードルの詩であつたかもしれない。それは鐘の話であつた。どういふ話であつたかも知れてしまつてゐるのだが、その中にこんな叙述があつた。

どこかに古いお寺があつてそこにこよなく美しい音色の鐘があつた。そして、その鐘の音の聞こえる場所にだけ人が住んで一つの村落ができていた。と、こつちう意味の文章であつた。学校を卒業するとともにフランス語もすっかり忘れてしまつた駄目な私には、もうこの詩の真意をさぐることもすらできないでゐるのだが、なぜかこの部分だけは忘れられずにゐる。そしていつも自分勝手な空想を馳せてゐるのである。

鐘にはもう一つ思い出がある。私は旧制の奈良の中学に学んだのだが、その学校の運動場をへだてた向こうに興福院こんぶいんという小さな尼寺があつた。そこにもやや高めの音色の美しい鐘があつた。

どういうわけかその鐘は毎日正午の少し前、十一時半か四十五分ごろに鳴りだすのであった。

その興福院の見えるところに理科教室があった。その鐘の音がしてくると、ついうとうとねむくなって、授業中の先生の声がすーっと遠ざかってしまうのである。

はっと気がつくともみんなが私の方を見て笑っている。

「……えっ、どうなるんだ。振動エネルギーは消えてしまうのか、えっ？」

先生は私に向かって問うている。私がうとうといねむりをしているのを見て、当てられたらしいのだが、何を質問されたかさっぱりわからない。

「さあ、水で顔を洗ってこい。」

先生にいわれて私は顔を洗う。理科教室の後ろには水道の蛇口がいくつもある。私が顔を洗って目をさますのを見ると、先生は説明をつづけられた。エネルギー不滅の定律の説明である。

ゴーンという鐘の音の振動エネルギーは空気を振動させて無限に拡がる。そして、あるおろかな人間の脳膜に伝わって眠らせもするが、他の大部分の振動エネルギーはやがて人間の鼓膜も刺激しないほど拡散する。しかしその無限に微弱化したエネルギーも消えて無に帰するということはない。人間に聞こえも見えないところでそのエネルギーは形をかえていつまでも伝わり伝わって、他のエネルギーに姿をかえているかもしれないのである。今鳴った興福院の鐘の音が、地球の裏側のチリの国で大地震の原因にならないとは誰にもいいきることはできないのである。

エネルギー不滅の定律である。だから地球はいつまでも生きてゐる。

エネルギーが不滅であるように、……と先生はつづけられた。物質もまた不滅である。

ある日欧州航路の豪華船がマルセイユの港を出航した。その一等船室に一人の婦人が乗っていた。何を想ったか、その婦人はひとり月夜の甲板に出て、ハンドバッグから小さなビンをとり出した。バリーで買ってきた香水である。その香水にどんなにまわしい思い出があつたのかしらないけれど、彼女はその小さなビンのセンをぬいて香水を大洋の波の上にふり捨てたのであつた。

……と映画好きの先生は弁士を真似て意味ありげな話をしているのである。

「ところでその海に落ちた一てきの香水はどうなるか。」

高い甲板の上から海面に落ちるまでもなく香水は一瞬あたりに香りをふりまいて消えてしまうと思うだろうが、その一てきの物質は霧となり、気体となり、空気の中の何かと、また海水の中の何かと融合し、あるいは化合して別の物質になるだろうが、物質そのものは永遠に消えることなく何らかの形でこの世に存在しつづけるのである。つまり物質不滅の定律である。かくして地球はいつまでもこうして存在しつづけているのであると。

鐘の音の話がいつの間にか物質になつてしまつたが、私は少年時代に覚えたこの二つの不滅の定律に、もう一つ定律を加えたいと思う。それは心不滅の定律とでもいうべきものである。

人が心に想いのかべたものは、たとえそれがどんなに小さく、とるに足りないものであつても消え失せてしまうことはないと思うのである。何かを想ったとき、それは良いことでも悪いこと

でも、美しいことでも醜いことでも、うれしいことでも悲しいことでも、表情に、動作に、あるいはことばに、文章に、形はいろいろにかわるだろうが現れる。そしてそれを見、聞き、読みすることによって他の誰かに伝わるだろう。誤解という伝わり方をすることも多いけれども、一つの想いというものは、けっして消え失せることなく無限に人の心から心に伝わっていくものだと私は思っている。だから人の世の中というものが存在しているのである。

人が死ぬ、だがその人が心に持った想いはその後この世に生きている。私の中にもその人の想いが何らかの形で生きているにちがいない。そう思うと百年前、千年前に生きた人も他人ではないような気がする。だから私は歴史小説を書く。私はまた、幼い日に、父から母から兄弟から先生から、そして数えきれないほど多くの人から多くの想いを受けたように思う。その想いは大人になってから受けたものより幼い日に受けたものの方がはるかに多くまた大きかったように思う。だから私は童話作家であるのかもしれない。

美しい鐘の音の聞こえる場所にだけ暮らしていたというその村の人びとは、何を想って暮らしていたのだろう。

私は今戸数二十五戸の小さな山里の部落に住んでいるのだが、ここには、お寺も鐘もない。だ何か見えない聞こえない不滅の定律がこの山里に人を住ましめ、私も、その中におかれているのだと思うと、この小さな山里が格別に、愛しくな^{かた}ってくるからふしぎである。

(ひろば・54・7)

読むということ

私はおよそ読書家ではないのだが、子どものための本を書いているばかりに、よく学校の先生やお母さん方の集まりで読書について話をさせられる。それで私はつぎのような話をするのである。半分は本心であり、半分はいいのがれかもしれない。

もう三十八年も昔になるのだが、私はいわゆる学徒出陣などといわれて海軍に入隊した。海軍に入っていちばん苦労したのはモールス信号を覚えることだった。頭の悪い私はあれがなかなか覚えられなかった。

モールスを覚える方法はいろいろあるそうだが、私が教えられたのは、あのトットトットという信号音を、ことばにして覚える方法であった。「イ」は「トット」なので、「伊東」と覚える。「ロ」は「トットトット」なので、「路上歩行」、「ハ」は「ハーモニカ」、「ニ」は「入費増加」といった具合に暗記するのである。これを覚えるのは簡単であった。だから発信は誰にでもすぐできた。むしろかしいのは受信である。